
女王様（笑）と悲惨な従者達と謎の軍団

東風こち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女王様（笑）と悲惨な従者達と謎の軍団

【著者名】

東風こじ

N9237E

【あらすじ】

怪しい一行とそれを付けねらつ黒装束の一団・・・これはこことは違うファンタジーな世界でのお話です

【〇】

「さあ、かかつてらつしゃい」

突然そう言つて鞭を取り出したのは・・・
ぱしん！ぱしん！

「つぎやーつ！、ぐおーつ！」

「おーほほほほほ、あたしはキャンディーよ」
説明するまでもなく本人の口から名前が出た。
ではとりあえず、説明しよう！

キャンディー・ハーブ・魔性の人、鬼、悪魔、女王様、etc.・
・す

なわち、数々の異名（？）を持つ自称“貴族の娘”である。しかし、
本当は

どこかの村の娘で、生贊にされそつになつたという噂もある。
とにかく、キャンディーは今剣士としての腕を研ぐ・一般では、
女王様と

しての腕を研いでいるとも言われているが・ために旅にでている。
と言う訳で、話を進めよう。

現在ここには、どこにでもあるよつたある村・名前を忘れたが・
である。

その中の酒場兼宿屋の入り口である。

哀れにも鞭で叩かれているのは、この酒場兼宿屋を経営している
店の主人
である。

なぜ店の主人が鞭で叩かれたのか？それは、食事に虫が入つてい
たため
あるとキャンディーは言った。

「うーつ、うーつ」

店の主人もかわいそうにうめいでいる。

「ちょっとあんた、何するんだよ」

店の奥から出てきたのは、店のおかみだった。

「どうせこうもありませんわ。この店は密に虫を食べさせるの？」

キャンディーが言った。するとおかみは、鼻息も荒く答えた。

「そうだよ、それがどうかしたのかい？」

「このあたりにこのようなものを食べさせるとは何度胸をしてますわね」

「“このやうなもの”とは何よ、“このやうなもの”とは、これはれつきと

したA定食・・・」

「こここの食事など食べてられませんわ」

一瞬、二人の間に熱い熱い視線が走った。

「ほう、じゃあ他へ行つてもらおうかね」

「言われなくてもそうしますわ」

店のおかみはそのままぱいと向こうを向いて奥へ下がつていった。

キャンディーの方も、

「いくわよ、ティム」

そう言つてすたと出ていつてしまつた。

「おいおい、ちょっと待てよ・・・」

そう言いつつ、その後を俺もついていった。後々のことを考えながら・・・

-始まり始まり-

【1】

そう、忘れていたが、俺の名はティムノーグ・ケレス。通称“ティム”。

一応剣も使えるし、そこそここの実力はあると、俺自信思つてゐる。なぜキャンディーと共に旅をしているかといふと、それは親父の

せいだつ

たりする。親父は、“家畜の敵”、“動物愛護教会の敵”等の悪名を持つ、

アイラート・ケレスである。その悪名の高さといつたら、その呼ばれ方から

してもよーく分かる。よつするに、動物を使った生態実験を行なうのが趣味

の、くそじじいである。そんな趣味は即刻止めてもらいたかった。

しかし・

・・・俺はそんな親父に、実験台にさせられてしまった。その実験とは、俺

に黒魔石を埋め込んだのだ。そもそも黒魔石とは、不思議な力・すなわち、

魔法のような力・操るために必要な石のことである。

そんな石を、と言つてもその石をそのまま埋め込んだのではなく、何か加

工してますます訳の分からない力を封じ込めて、俺の身体に埋め込みやがつ

たのだ。それは、服従のための石だった。

俺はその時以来、ずっとキャンディーについて回らなければならなくなつていた。

親父のバカヤロー・・・。

【2】

あの酒場の騒ぎから1刻（約一時間）が経った。

しかし俺達はまだ、村の中をうろついていた。まあ、あんな騒ぎを起こし

ちまた以上あそこにはいられないだろう。でもこの村には、宿屋はあの店

「おい、なんでちょっとのことですぐ短気になれるんだよ？」

「虫は嫌いよ！」

吐き捨てるようにキャンドイーは言った。

「・・・？」

俺が戸惑っていると、キャンドイーが何かを察したように辺りの

気配を伺

いだした。

俺も殺氣を感じて剣の柄に手をかけた。

ブン！

いきなり真後ろから何者かが切りつけてきた。しかし俺は、それをひょい

とかわすと逆にそいつに向って切りつけた。

ガキン！――！

なんとそいつは、素手で俺の剣を受けとめやがった。

じゃあなぜ、「ガキン！」と音がしたかといえば、そいつの手には、金属

性の筆手のようなものがはめられていたからだ……と思う。

そいつは、それからひらりと身を翻して、後に飛びのいた。

「あなたたち、いったい何の目的があつてあたいたちを襲うの？」

キャンドイーが聞いたが、そいつらはマントで体を覆っていて、さらに頭

は、フードにすっぽりと包まれている。

「・・・・・」

そいつらは終始無言だ。

ちなみに、「そいつら」と言つたのは、人数が3人だったからだ。

さらに

、3人もが皆同じ格好をしている。

ふと、3人のうち、真ん中にいた奴がこちらに向かつて來た。

俺は身構えたまま、剣を相手に向けて相手の隙を伺つた。

・・・と、と一とつに相手の方から話し掛けってきた。

一 話がある

ど
ん
な
?

俺は置き返す

卷之六

卷之三

俺はキャンディーに言った。

お戦ひりと

「しかたがありませんわね」

ギヤンテ、口は
汚々てはあるがものの、あい、云は、いていく
ことにし
たらしい。

[3]

ヨー、ハタン！ · · · カチヤリツ —

そこは牢屋たつたつたつ

おたしかことな猿苦しいとこにへ戻しこめらわれなくせ

レ
ノ
?

「どうしてやなあ……」
あいつは、俺達つらへようと叫んでおかながい、連れ
ていられ

たところは城だった。
キャンディーの怒るのももつともだとは思ったが、どうも腑に落ちない。

「なんで、捕まつたんだろ・・・」

俺は、誰にともなくつぶやいた、がしかし、

「なんでって、あんたがあの時におとなしくついてつたりするから、

こんな

ことになつたんじやなくつて？」

キャンディーが聞き逃すはずもなく、俺に怒りをぶつけまくつて

いた。

しかし、俺はキャンディーの言い分を、さらつと聞き流して言った。

「でもなー、なーんもしてない俺達がなんで捕まるんだ？」

「どーせ、あの酒場の爺さまのせいでしょうよ。まったく・・・」
俺は、キャンディーの愚痴を聞きながらも別のことを考えていた。
どうもなにかがおかしい。何がかと聞かれてもそれはちょっと困るが・・・

それでも、城の門番とマントの連中の話を聞くかぎりでは、俺達はただのせこい喧嘩をしてしまつた奴でなくて、重要指名手配とかいう奴らしいん

だが、なんでそんなことになつたんだ？

等と俺が考へてゐる間にも、キャンディーはまだぶつぶつと言つていた。

【4】

「爆裂・火炎弾！」

ちゅどどどーん！ゴゴゴ・・・

いつたいどれほどの時間が経つたか、不意に俺達の部屋の扉が開いた。い

や、開いたといつより、壊したといつたほうがいいか・・・

「さあ、行くわよティム」

なんと扉を破壊したのはキャンディーだった。

「おいおい、こんなに派手にしたら、見張りに気付かれちまつだろ
うが」

などと言いつつも、俺達は外へ外へとダッシュで逃げ出していた。
「どーせ見つかるんだったら、この方がいくらかいいわよ」「
「そーかよ、また捕まつたら今度はひでえ目にあうだけなんじゃね
ーか?」

「だつたら、捕まらなきゃいいんですわ
「キャンディーは、こともなげに言った。

「おいおい・・・」

俺は頭を抱え込みたい気分になっていた。

普通一般の人が聞いたら、頬もしい言葉に聞こえるかもしない
キャンディ

イーの言葉だが、俺はその言葉の裏に、何の考えもないといふことを知つて
いた。

しかし、どーにか俺達はなんなく城の外に出ることができたよう
だつた。

【5】

「ちょっと待て!」

しかし、逃げ出したはいいが、行くあてのない俺達の前に、1人
の剣士風
の男が現われた。

「なんか俺達に用か?」

俺は相手が俺達を追つてきた敵かと、身構えた。

「食料をよこせ、そもそもこの娘の命はないものと思え」
話しながらも突然猛ダッシュをかけて、キャンディーを背後から
がつちり

と押さえこんでいた。しかも、そいつの手にはダガーが握られてい
た。

「おいおい、そんな物騒なもんはしまって・・・」

俺が言い掛けながら近付いていくと、そいつはキャンディーの首筋にピタ

ツとダガーを当てた。

「それ以上動くと、本当にこいつの命はないからな」

どうやら本気のようだ。

「わかったわかった、ここに食物を置くから、そいつを放してくれ」「分かればよろしい、じゃあさつわと置いてから下がれ」

「へいへい・・・」

そして、俺は食物をバックパックから取り出して、下に置き、後ろに下がった。

「へへへっ、こりや悪いな」

そいつはにやにやしながら、食物に近付いていく。

「さてつと・・・」

「危ないっ！」

「へつ？」

ドガーン！

そいつが食物を拾おうとした瞬間のことであつた。

俺は、そいつに対して警告してやつたが、その時にはもう大きな火炎弾が

俺の置いた食物に命中していた。

俺は、冷汗をかきながらキャンディーを探した。

しかし、幸いにも火炎弾はそれほどに威力のあるものではなかつたために

火が燃え広がることはなかつた。

「誰ですの、こんなひどいことをするのは？」

よかつた、俺はほつとしてキャンディーに駆け寄つた。

「おい大丈夫か？」

「大丈夫じゃありませんわ、まったく・・・これを見てみなさい」

キャンディーのマントは煤けており、火が付いた痕も残っているようだ。

しかし、怪我らしい怪我もなかつたと、俺はほつとした。

俺達は、そのままなぜ爆発が起こつたかなどには構わずに、その場を立ち去つた。

【6】

そして、あれから丸一日が過ぎた。

俺達は、そのまま北を目指して進んでいた。

「あらつ、あれはなんですか？」

キャンディーが、そう言って指差した方を見ると、そこには黒マント姿の3人がいた。

「まったくしつこいですわね、あなたたちつー」

キャンディーは言って、ぴっと彼らを指差す。

「あんたたちなんか、あたににかかつたら全然歯がたたないでしょうけど、

今日はこのタイムが相手よつーさあ、かかつてらっしゃい

「やつぱり・・・

俺は、こうなることを予測していたが、この場合やつにむなづに、結局

戦うしか道が残されていなかつたのだ。

「よーしつ、だつたらかかつてこによつ

俺は威勢のいいことを言いながらも、奴らの強さを推し量るようになじつと

奴らをにらみ据えていた。

・・・と、先に動いたのは奴らの方だった。

「裂！」

「ガーン！」

俺達は、相手が呪文を唱えたその時に後に飛びのいた。そして、間一髪で

相手の攻撃魔法をかわすことができた。

しかし、相手は3人だったので、俺はすかさず剣を抜いて構えた。
ブンツ！ガキーン！

相手の剣と俺の剣がぶつかる。俺は必死で相手の攻撃を受け流していた。

そして、相手の内2人が俺に向かってきていった。

「おとなしく観念しろ！」

挑むように剣を繰り出しながら、相手は俺に叫んだ。

「そう簡単にくたばってたまるかよ！」

俺は悪態をつきながらも、じりじりと押されまくっていた。

ブンツ！ガン！ガン！ガキーン！

どうやら、本当に相手の方が1枚も2枚も上手のようだ。

俺は、あつという間に追い詰められていた。

ガン！ガキッ！ガシーン！

俺は剣を弾かれてしまった。

もう駄目だ・・・・・俺は覚悟を決めてそここじっと佇んでいた。

た。

【7】

「までいっ……！」

「何だきさまは！」

俺が、もう駄目だと観念したちょうどその時であった。俺の目の前で攻撃

をしようとしていたやつが、後を振り返る。

「そいつは、おこらの獲物だ。そちらで勝手に殺してしまっては困るなー」

黒マントの連中はそいつを見ると、すぐに「ひつ」と打ちして、

逃げて

いつた。

「おい、大丈夫か？」

そいつは、俺に向かつてそう言つた。

「おまえはあの時の！」

俺はそいつを覚えていた。・・・というか、つい一日前に俺の食料を取る

うとして、爆発に巻き込まれたと思つていたのだ。

「どうして・・・？」

俺が最後まで言い終える事無く、そいつは答えた。

「どうして、無事だつたかつて？そんなのは簡単だ。あん時おいらは爆発が起こるちょっと前に魔法を使って逃げさせてもらつたのか。しかし危なかつ

たぜあれば」

「あんたはいつたい何者なんだ？」

「おいらか？おいらはみゅらーずっていうただの傭兵だ」

「あんた・・・」

俺が次の言葉を出す前に、異変が起つた。

地震が起つたような地響きと共に、目の前の地面がぱっくりと口を開けていた。

そこから唸り声とも雄叫びともとれる声のよつなものが聞こえてきた。

「こりや、本格的にまずいぜっ」

みゅらーずは、言つて身構えると、即座に行動した。

「なにがまずいんだっ？」

俺はみゅらーずに問い合わせたが、返ってきたのは戦いの音だった。突然みゅらーずの目の前に、黒マントが2人現われたのである。

そして、

俺の目の前にも1人現われていた。

「おまえはここで死んでもいい」「ひい！」

俺の前にいる黒マントが言つて、切り掛かつてきただ。

「させるかっ！」

俺は、攻撃を受けるために、勢いをつけて相手に向かつていった。

【8】

それは、長くつらい戦いだった。いつたい、どのくらい打ち合つたのだろうか？

俺は、もう手が痺れて今にも剣を持つ手が動かなくなるのではないかといふ思いにかられていた。

しかし、相手はまだまだ戦えそうであつた。

「しかたないぜっ、こうなつたら一気に勝負をかけてやる」

俺はつぶやきながら、剣を持つ手に力を込め、精神集中を開始した。

相手は、俺の精神集中に気付いて、一気に間合いを詰めてきた。そして、

俺の集中を解こうと、必死に攻撃を繰り出していく。

黒マントの攻撃は、正確に急所を狙い、しかもその1撃1撃は力強いもの

だつたので、俺の精神集中は時々途切れがちになつていた。

こんなときにあいつは何をしてるんだ・・・俺はそう思しながら、

キャン

ディーの姿を田で探していた。

しかし、どこにもキャンディーの姿は無かつた。・・・まさか、さつきの

地震でできたあの穴に落ちてしまつたのか？ふと、そんな思いが俺の脳裏をよぎる。

そんな一瞬のスキを、黒マントは逃さなかつた。

ガン！ ガン！ ド、ヅッ！

「ぐあつ！」

俺は、黒マントの一撃をまともに受けてしまった。

左腕に激痛が走る。どうやら腕の骨にひびが入つたか、折れたか・
・・・ど

ちらにしても、左腕はもう言つことを聞かなくなつていた。

「ふつふつふつ、それではもう戦えまい」

黒マントが不敵に笑いながら、俺の方に1歩1歩近付いてくる。
俺はなすすべもなく、ただただ後退するばかりだったが、ふいに

後ろの巨

木が俺の後退を阻んだ。

「これで終わりだつ！」

黒マントは、おもいっきり振りかぶり、振り下ろした。
ブンッ！

剣が唸りをあげて俺に襲いかかつてきた。

【9】

これで終わりなんだな・・・俺がそう思つたときであつた。
ガキーン！

横から何が黒マントの剣をがつしと受け止めていた。
「てめーら、俺の獲物に手を出すなと言つただろうが」「
どうやら、みゅらーずが俺を救つてくれたらしかつた。
「おまえ等の攻撃などこの俺には効かんのさ」
言つて、切り掛かるみゅらーず。

ガン！ ガン！ グサツ！

「ぐおーっ・・・！」

黒マントは、みゅらーずの攻撃の前に倒れていた。

迅い攻撃だつた。黒マント達はなすすべもなく・・・。

「おい、大丈夫か？」

「ん、左腕をやられた

「そうか・・・」

俺は動かない左腕に簡単な応急処置を施し、キャンディーを探した。しか

し、キャンディーは見つからなかつた。

「たぶん、あの穴に連込まれたんだろうよ」

みゅらーずはそう言つた。

「あなたはいつたい何者なんだ?」

俺は、みゅらーずがただの傭兵でないと確信して聞いた。

「おいらのこと聞いても駄目だぜ。なぜなら、あなたはおいらの

敵なんだ

から

「敵?」

「そりゃ、これからそうなるんだよ」

俺は、みゅらーずが何を言つているのか分からないとこりふりこり

首を振

つた。

「まあ、いざれ分かることだから」

みゅらーずは、それだけ言つと口を開ざした。

「それにしても、キャンディーはどうこに連れていかれたんだり?~」

俺がそう言つと、みゅらーずは答えた。

「城だ」

みゅらーずは、何でも知つていいぞと言わんばかりの答え方をし

た。

「おまえは黒マントのことを知つていいんだろ?」

俺はみゅらーずに聞いた。

「ああ、知ってるよ」

「何者なんだよ、あの連中は?」

「あいつらが、『影』の連中だ。『影』って言ひのせ、組織のこと

だ。そし

「いいからが肝心などいなんだが、おまえさういやうの連中に

ターゲッ

「これちまつたらしご」と

俺は、あんな連中に殺されると想つて、冷汗が出来るのを感じた。
でも、どうして？」

モード

俺は、體を返すといふいられなかつた。

それは……俺もしらん。しかし、今に分かる」て

「大体、キャンディーはどうなるんだよ？ あいつも狙われてるのか？」

たぶん、大丈夫さ。

俺は、キャンディーの事が心配になつてきた。

「当然行くんだろう？」

行
く
さ
ー

備は、みゆらーすの間に短く答えた。

子守歌

10

六

(後書き)

実はこれも1作目と同時期に作成したものでした
1作目とは違つてライトファンタジーで作っているので
気軽にお読みください(^-^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9237e/>

女王様（笑）と悲惨な従者達と謎の軍団

2010年10月26日02時53分発行